

# 名張の地形

## 土地の姿とそのでき方

1 地形面には浸食面と堆積面がある。前者の面でこれ以上浸食が進まないと考えられる平坦な地形面。一般に日本では隆起準平原といわれ、高原をつくっている山地や山頂に平坦面のあるものをいう。

2 地殻変動の運動の形がそのまま近い姿で残されている地形。

3 近畿地方の中央部の地域で、敦賀湾を頂点とし、伊勢湾・大阪湾を含み、紀の川・柳田川を結ぶ東西の線を底辺とした三角形の地域の地学上の用語。活火山がなく、断層運動でできた山地と盆地が交互に分布している地域（藤田和夫「変動する日本列島」岩波新書 一九八五）。

名張市は、東に布引山地、北に信楽高原、西に大和高原、南は高見山地とにかこまれた伊賀盆地の南西部にあります。

市内の地形は、中央部から北部にかけては伊賀盆地の南部に位置する名張盆地があり、盆地の南側には高見山地の北縁の室生山地、西側には奈良県へ広がる大和高原があり、名張盆地内には名張川とその支流に沿って丘陵・段丘・谷底低地があります。

室生山地は国道一六五号の南東側にあつて名張市の過半の地域を占めています。名張盆地の丘陵から急に高さが増して高見山地に南に向かつて次第に高さを増して高見山地に達します。山地での最高点は奈良県との境界にある国見山（八八三メートル）で、ここから西方の長坂山（五八五メートル）まで山々が連なっており、山地内の山頂群の高さは西へ次第に低くなっています。山地を刻む名張川・青蓮寺川・滝川の三つの河川の流れ方が山地の中を蛇行しながら北西から北に進み、さらに西にかえて盆地内の名張川に合流するという、共に同じ傾向を示しています。

大和高原は名張盆地の西側に広がり、起伏の小さい地形の準平原の山地を形成しています。高原はその南端で市の境界に位置する茶

白山（五三六メートル）を最高として北西方向に高度が低くなってゆきます。茶白山の南東側は急斜面になって名張川とその支流の宇陀川の谷底低地に続いています。これは山地と低地を境する名張断層による断層崖です。奈良県の宇陀盆地から流下する宇陀川は名張の低地に入ると断層崖と平行に北東に進み、名張市街地近くで名張川と合流し、蛇行しながら北進して大和高原に入り、山地内で一時西に変えて木津川に入ります。

名張盆地は北部の上野盆地と同様に標高二五〇〜三〇〇メートル位の丘陵が見られ、旧市街の西側から桔梗が丘にかけて広い地域があります。盆地を流れる名張川・宇陀川の両岸には数段の段丘が見られ、その平坦面には旧市街地や集落が作られています。

名張の谷底低地は蔵持町から赤目町にいたる名張川とその支流の宇陀川をつくる広い低地や小波田川に見られる低地で古くから農耕地として利用されている地域です。

名張の地形の特色は、一つは山地の形であつて、起伏の小さい高原状平坦面からできており、遠望すると、山地より低い丘陵や段丘の面とあわせて階段状の平坦面のある景観が見

られることです。もう一つは河川の流路の方向等の類似性です。北東に流れる宇陀川はその北側にある笠間川と奈良県曽爾村を流れる

青蓮寺川とは流路が平行であり、宇陀川を合流した名張川と青蓮寺川は山地で峡谷をつくり、流路の方向が共に反時計回りをしています。前述のように名張川・青蓮寺川および滝川も同様です。

このような名張の地形は地殻変動によってできた土地の姿であつて変動地形<sup>2</sup>と言います。地学の研究によれば、近畿地方は「近畿トライアングル（近畿三角地帯<sup>3</sup>）」と呼ばれ、近畿地方から西南日本へ土地の高さに東西方向にうねりがあり、中国地方と四国の山地・鈴鹿山地と紀伊山地はうねりのたかまりであり、瀬戸内海や布引山地と大和高原はうねりの谷にあたると言います。その証拠に布引山地と大和高原は鈴鹿山地の山頂群より高さが低く、侵食の進行が遅れて準平原の平坦面を広く残していると考えられます。また近畿トライアングルには北東 南西方向と北西 南東方向の二系列の断層群が分布しています。この断層により土地はブロックに分割され、伊賀地方ではそれぞれのブロックは北東に傾き、ブロックの南東側に急斜面の断層崖ができた

いわれます。

高原状の山地や河川の流路の類似と峡谷の存在はこのような変動地形のつくつたものです。

（山田 純）

準平原の大和高原と名張断層による断層崖

（矢川より茶白山方向を望む）



### 参考資料

- 西岡芳晴・尾崎正紀・山元孝広・川辺孝幸（一九九八）『名張地域の地質』地域地質研究報告（五万分の一地質図幅）地質調査所
- 藤田和夫（一九八五）『変動する日本列島』岩波新書